

まきどき・植えどき・収穫どき
どきどき情報

1月

野菜の作業 今年も元気に楽しく 新たな品目や作型に挑戦しよう！

種まき	栽培管理のポイント
<p>ハウス育苗型春レタス ・標高 500m で4月下旬～5月上旬頃に収穫する作型では今月が播種期です。</p> <p>冬まきパセリー ・播種後十分に灌水をし、温度を 20 前後で管理。(25 以上にしない) ・発芽後は日中 20、夜間 10 を目安に管理。 ・本葉 3～4 枚で間引きをします。</p>	<p>果菜類の育苗管理のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・床土の条件 果菜類は 30 日前後から品目によっては 70 日以上もの間、根域が限られた鉢で育てなければならぬことから良い土壌条件の床土を使う必要があります。無病で通気性と保水性が保たれていることが重要で、良質な有機物を混ぜる必要に応じパーミキュライトやパーライトなどを加えた床土を用意します。 ・温床 低温期にはまず地下部の温度を確保することが重要で、電熱線を用いて育苗温度を保持する必要がありますが、育苗床は水むらをなくするため高低差がないようにできるだけ平坦にし、日当たりが良く風の影響の少ない場所に設置します。発芽時と幼苗期は 28～30 に設定するが生育が進むにつれ温度を下げます。 ・光環境 早春期は二重カーテンやトンネルなどを用い温度確保を図りますが、時的に日射量が少なく被覆資材で覆われているため、光線不足を招き徒長気味の生育になりやすく、特にトマトなどは光要求度が高いことから受光不足とならないよう生育適温の範囲でなるべく被覆のかけはずしを小まめに行うようにします。 ・温度・水管理 品目毎の生育適温域内で保温・加温を行い、日中は 25 を目安に換気を行います。夜温が高すぎると軟弱徒長になりやすく初花房位置が上昇したり、着花数が減少してしまうので育苗期間中は徐々に下げて行きます。かん水は、なるべく晴天日の午前中に鉢の下からしみ出る程度に行いやりすぎないように注意し、夕刻には表面が乾いている程度に管理するのがポイントです。
<p>ネギの春まき育苗 長野県のネギ栽培は、従来、秋9月頃には種して翌春の4～5月定植、10～11月に収穫する作型が多かったが、最近では、8～11月の出荷要請が強くなっていることから、春まきタイプの品種を早春にハウス育苗する夏秋どりの作型も定着してきています。 秋まき栽培では、は種期が遅れると越冬中に寒害を受け、小苗となって収量が上がらなくなる反面、早すぎると苗の成育が進み抽台するので、定植苗の茎が6mm以上の大苗にならないようは種期を設定することが重要となります。 一方、無加温ハウス育苗による春まきは、5月上旬に定植ができれば、8月中旬からの収穫が可能となります。ただし、は種期が早すぎると、低温と日照不足で発芽や苗の生育が悪く、立枯病などが発生しやすくなるので、2月下旬まきを基準とし、5月上旬に大苗の植え付けを行うようにします。 なお、この場合の苗は4月下旬～5月中旬の定植が可能となることから、定植苗として販売することも可能となります。 実際の育苗法としては、は種の10～20日前に、a当たり完熟堆肥200kg、苦土石灰20～30kg、窒素・りん酸・加里を各々2kg程度づつ施し、耕うん整地しておきます。露地育苗では、床幅120cm、通路30～40cm、高さ5cmの揚げ床としますが、ハウス育苗では種床はトンネル被覆ができる床幅に作り、5～8cmに条播きし、かん水後は乾燥防止のためベタがけ資材を張りトンネル被覆をして保温しておきます。 は種後は、10～15日で発芽しますのでベタがけ資材を取り除き、トンネル内気温が25以上にならないように換気するとともに夜間は寒くなるので保温マットなどで覆い管理します。 このとき高温と乾燥による苗の葉先枯れに注意するとともに、草丈が10～15cmになったらa当たり0.3kg程度の追肥を行い、本葉3～4枚、1本重15～20gの充実した苗の育成を目指しましょう。</p>	



農業豆知識

抽台と日長の関係

前号で抽台（トウ立ち）する仕組みのお話をしましたが、その中で日長により抽台する代表的な野菜として、長日植物の代表選手であるホウレンソウを紹介しました。

今回も引き続き、ホウレンソウを例に日長と抽台の関係をより詳しく紹介したいと思いますので、作期や品種などの選定の参考にさせていただき、安定生産に結び付けていただきたいと思います。

まず、経験的に越冬したホウレンソウは4月の中旬頃から急速にトウが立って来ると感じていませんか。

それは、その頃から日長時間が13時間を越えるようになってくることによるものです。（右図）

ホウレンソウの東洋系品種では12～13時間、東洋系品種では14～16時間を超えると花芽分花・抽台が促進されます。

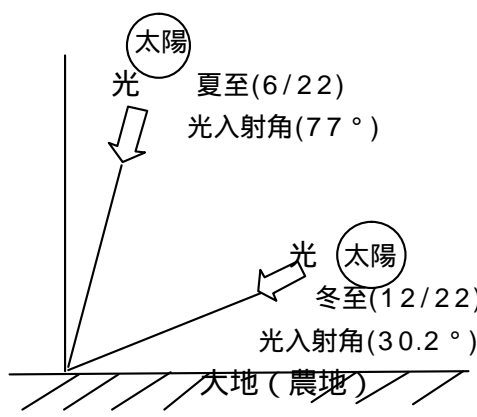
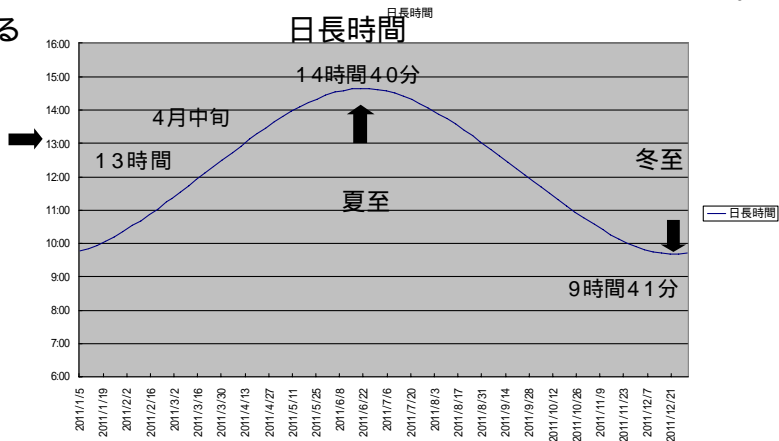
日長は6月下旬がピーク(夏至の6/22前後)で上田の場合約14時間40分あるため、4～7月上旬までは種は最も抽台しやすい作期ということになります。そこで抽台しにくい晩抽性の品種の選定が重要となります。

晩抽性の品種としては、前述したように西洋系品種のほか、味や葉の形状の良い東洋種に育種により晩抽性を付与させた中間種の中から選定することが重要です。

7月中旬以降も高温長日条件は続きますが、生育の後半は日長が短くなり温度も徐々に低くなるので抽台が少なくなります。なお、高冷地では日長時間は変わらなくても、夏でも温度が低く生育適温に近いため生育が早く、花芽が分化したとしても、抽台前に収穫が可能となるわけです。

したがって、夏の暑い時期での栽培では、寒冷しゃなどの遮光資材の活用により照度の調節、地温・植物体温度を低下させることにより抽台抑制効果を高めることが可能となります。

なお、夏至の頃が一番日長時間が長いとお話しましたが、そのときの太陽の角度（位置）はどの位か、逆に冬至の頃の太陽の角度はどの位かを図示しましたので、前頁でお話したように「日当たりの良い場所にハウスを設置」する場合などの参考にさせていただきたいと思います。ちなみに冬至の頃、南側に例えば5mの障害物があるとすると、その障害物から約8.6mのところまでは日陰となる計算になります。



冬期出荷に向けた小物野菜の試験栽培状況（1月上旬）

前回から紹介しています試験栽培の状況ですが、12月の下旬から定植を始めました。定植した品目は、畑菜、チンゲンサイ、小松菜、ホウレンソウ、リーフレタスなどで、温度に対する適応性や移植後の活着の良し悪しなどにより見た目に差が出ています。

現在は、ハウスの二重被覆のほか、ポリトンネルで保温をするようにしました。朝はギリギリ0 程度を保っていますが、何らかの保温資材が必要かと思われます。逆に晴天の日中には30 を超えるような状況にありますので小まめな管理が必要となります。

引き続き、試作を行っていきますので、関心のある方は是非ハウスを覗いてみてください。



トンネル内のホウレンソウ ハウス内の様子

あさつゆ連絡先 電話:FAX 41-1062

技術事項作成協力：上小農業改良普及センター
地域係 中澤普及員（25-7156）